平成 28 年 5 月 22 日発行

大町山岳博物館友の会　第　168　号

ゆきつばき通信

【報告】平成 28 年度山博友の会 総会

平成 28 年 4 月 24 日（日）　午後 3 時 30 分～午後 5 時
山岳博物館　講堂
出席者 20 名（講演会　約 30 名）

今年度の友の会総会は中畑さんを議長に行われ、昨年度の報告、今年度の事業・予算が承認されました。

共催事業報告は、担当した運営部役員よりそれぞれ行われ、各担当の感想などもあり映し出されるスライドと共に味のある報告となったと思います。

開催に先立って、宮澤会長からは、新生友の会は間もなく 40 周年を迎えるものの、ここのところ人数が少なくなり高齢化してきているが、活発な意見を出して新しい年度を楽しくやっていきたいと挨拶がありました。また、鳥羽館長からは麻田先生の講演に対する対応では友の会と一緒に一つ一つ解決していきたい旨と、事業、イベントへの協力要請を含めてご挨拶をいただきました。

最後に長沢顧問より、友の会の事業や活動は他の団体から見たら羨ましがられるもので、麻田先生の言う知の発信をいろいろな形で進めていきたいとご講評いただきました。

講演会

「大町山岳博物館をとおした地域資源の再発見
―友の会が支える博物館事業から―」

東京大学東洋文化研究所（元信州大学地域戦略センター）　麻田　玲さん

《期　日》　4 月 24 日（日）　午後 1 時 30 分　～　3 時 00 分
《場　所》　山岳博物館　講堂

麻田玲さんは大学卒業後海外で支援活動を続けられ、東京大学公共政策大学院で棚田を通した地域振興、地方創生の研究をし、旧中条村の棚田が縁で信州大学の地域戦略センターで研究員をされました。

麻田さんのご講演は、信州大学地域戦略センターが大町市と協定実施している大町市定住促進研究支援事業として、山岳博物館を通して実施できることを研究したものです。大町市の人口は 2040 年には 2 万人を切ると予想され、これからの問題を先取りして解決しようという研究の一環のものです。

研究に先立ち、研究によって知りたいことが策定されました。大町市は山岳文化都市を標榜して他の市町村にない強みと魅力があり、その基本となった山博は日本で初めて山岳をテーマとして誕生した博物館で、それが行政ではなく地元の青年たちによって立ち上げられた博物館であることが着目されました。そして山博には外郭団体の友の会が活発に活動しており、またその会員の 6 割が市外の会員であること、Ｉ・Ｕターン者を多く含んでいること、会員の継続年数が長いこと等に特異性が見出されました。一方、山博と結びついている山岳文化都市宣言の大町市民の認知度は低いという調査結果がありました。したがって、友の会会員が大町市や山博に魅力を感じ、継続的に会員となって山博を支えている理由を明らかにすれば、大町市や山博の魅力につながる発見や再認識があるとして研究が始められました。

麻田さんは「市外の会員は外の人だから市内の会員とは違った見方をしている。遠い人と近い人では見方に違いがある」と仮説を立てて研究を始めました。社会開発という地域を盛り上げ経済を良くする際に、内部者を主体としたと

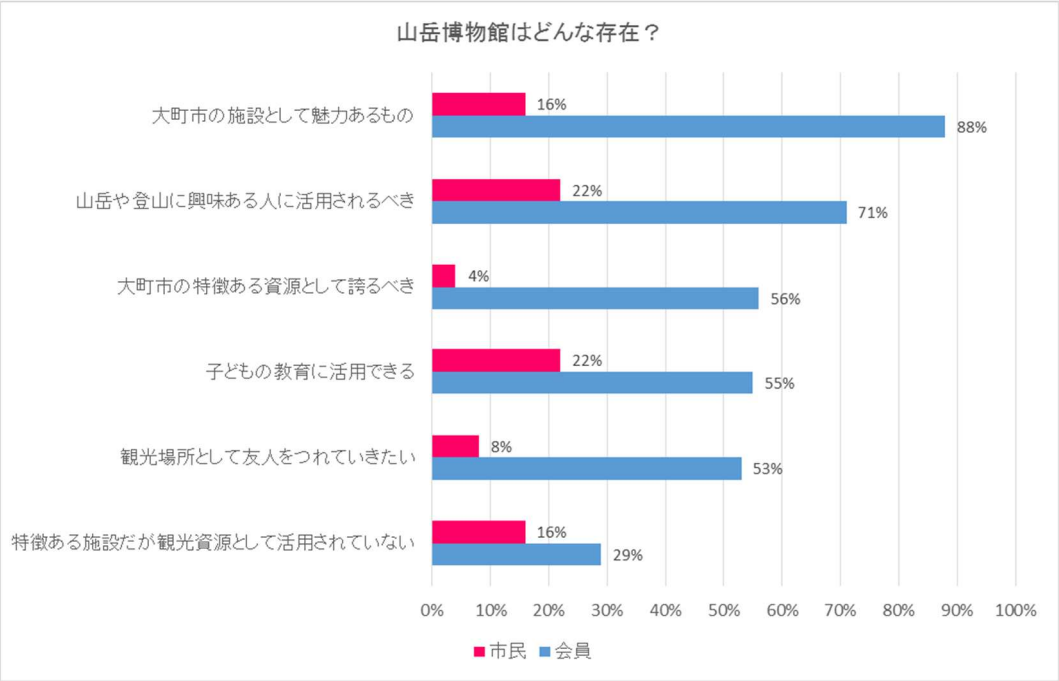
きに、外部者には内部者の意識を変移する役割があり、社会関係の変化をもたらす下ごしらえに必要な存在が外部者と見られていました。

山博は地域資源であり、資源とはそれ自体ではなくそれが貢献している働き、それがどんなことができるかが資源とされます（ジンマーマン）。人々がそれに向けるまなざしによって色々な形に変化するのが地域資源で、外部者が加わることによって今までと違った使い方が出てくるという考えが研究につながったということです。

研究は会員に対するアンケートからはじめられました。役員会でも座談会を開催したり、個人インタビューも行われました。一方、大町市の協力で無作為に選んだ市民にもアンケートが実施されました。

友の会のアンケートの回収率は 56%と非常に高く、しかも回答が早く、記載も多くありました。会員構成は 60 歳代以上が 85%、会員になった理由は複数回答でしたが、会員特典とした人は意外と少なく、山が好き、山博そのものが良い、山博を支援したいという、山博に対して親近感を持つ会員が多い傾向がありました。山博に行った回数はほとんどが 10 回以上で数え切れない人がほとんどでした。会員特典の中では「山と博物館」等の購読が、遠くにいても山博のことがわかりつながりを感じられる、という回答が多かったということです。山博の魅力についてはその設立経緯を理解し特別な存在であるという回答が多く、展示内容、立地環境、展望、付属園と続きました。会員を継続（平均継続年数は 17 年）する理由は、山博が好きが 75%で、なんとなくとしながらも会費を払い続ける人が 9%いたとおどろかれました。大町市の魅力は自然環境が豊かであることが一番で、市における山博の魅力は、市の施設として魅力がある、山岳や登山に興味がある人に活用されてほしい、大町市の特徴ある資源として誇るべきと考えている人が多く、子供の教育での活用を考えている会員が多いようでした。麻田さんが意外と感じられたのは観光資源として活用されていないと回答した会員が 3 割しかおらず、7 割の会員が活用されていると見ていたことでした。そして麻田さんの仮説を覆したことは、近い人も遠い人も同じ考えを持っていた、近い人、遠い人の考え方に傾向がなかったことのようです。それは物理的な遠近は会員には関係がなく、心理的な近さが山博への親近感に、山博を支える動機になって、地域差が生じないことが分かったということです。

市民に対するアンケートの回収率は 36%でこれも高く、市民の山博に協力する気持ち、関心の高さがあり、重要な点としています。発送先の年代比率は人口比よりも若い人の比重をあげてあったのですが、40 歳代からの回答が一番多く、60 歳代、50 歳代、30 歳代と年代による大きな差がなかったようです。回答者について、もともと大町市民という人は 3 割くらいでした。山博に行った回数は 2～5 回が一番多く、1 度もない人は 8%、10 回以上という人も 20%いてばらついていました。山博で行ったところは付属園が多く、常設展を見ている人も多くありました。友の会を知っているかの問いには、知っている人が 14%、知らない人は 86%でした。14%もの人が知っているともいえると評価されました。知っていて会員でない理由は、会員特典を知らない、興味がない、山博が近くにあるので会員になる必要を感じな



いとなりました。これは山博に限ったことではなく、近いゆえに会員になってまで一生懸命行かなくてもよいと考える人は多く、チャンスがあれば行こうという施設は多くあります。市民にとっての山博の存在は、山や登山に興味がある人に活用されるべきが 22%、子どもの教育に活用できるも 22%。活用されていないと考える人も 16%いる一方で、山岳文化都市として特徴があると考える人もいて、ばらついて大きな傾向はなかったということです。大町市の魅力は自然環境が豊か、温泉があるがあげられ、山博があるに回答している人もいて、大町市の施設としてひもづけて考えている人もあるということです。麻田さんはこれより、近いゆえに特別な親近感は持ちにくく、自分たちが積極的に活用する施設というよりも、教育施設あるいは実用的な施設で、周辺の好きな人が活用する施設と認識されていると分析しています。なお、友の会については、自由記載でしたが、知ったら入っても良いと考える人がいたということです。

アンケートを考察すると、市民と友の会会員ではほぼ同じ質問でも差があり、山博が大町市の施設として魅力がある、活用されるべき施設であると考える人は会員に多くありました。この意識の差は、市民は山博が近いので特別のものとして見ておらず、アンケートによって改めて意識されたともみられるということです。

山博を大町の資源であり活用できるものと考える時、物理的な距離よりも心理的な近さが資源を認識することに大きく働き、市民には身近なものであるがために資源と感じることに難しさがあると推察されました。これは市民が悪いのではなく、外から見た方がものがよく見えることがある例です。すなわち、外部者には内部者に気付かせる役割があるということです。

どのように認識すれば資源となるか、それは「多様な認識に基づく複数のパターンが存在する（平野）」で、山博をいろいろなとらえ方をしてみると、資源としてアピールできるいろいろな形があるということです。この山博に限らず、来館者数、会員数での評価には限界があり、今はインターネットで多くの情報が取得できる時代であり、来館しなくてもわかってしまう、来たことはないけれど山博を知っている人

は多いはずで、そのような違った評価基準を持てば山博の魅力をアピールでき、大町市の魅力につながる評価方法があるということです。

友の会の遠方会員と近隣会員に違いが見られないことから、山博の認識にはその距離は関係なく、遠くの会員は来館する回数や行事参加の機会は少ないけれど、山博への思いは同じで、遠くの会員の役割は大きく、来館できなくてもファンはいることになります。

また、足を向けさせることが難しい時代ゆえに、山博自体が外に出ていく「アウトリーチ」が求められており、自分たちが発信できる物を考えていく必要があるということです。

山博の魅力を大町市の魅力にどのようにつなげていくか、それには友の会の会員の役割が大きく、会員が知っている山博や大町市の魅力を活用することであり、市、博物館、市民、友の会それぞれに役割があります。大町市は山岳文化都市と言いながら山博の活用ができておらず、市民が知らなければ外の人も知らないままです。山がある町はどこにでもあるわけで、山博があるからこそ山岳文化都市を宣言しているのに知られていないのは、行政の活用の仕方が上手でないといえます。山博には友の会があり大町市は友の会の「知」を活用していくべき、すなわち友の会員は大町市の魅力を知っており、山博と活用して山岳文化都市としてひもづけるべきということです。インフラ整備も必要で、信濃大町駅から山博までの足を週末には市内循環バスなどで確保したい。山の日も制定された大きなチャンスの時に行政として取り組むべきで、宣言するだけでアピールしたり活用しないのはもったいないと話されました。その際、山博はファシリテーターとして、大町市、市民、友の会をつなげる中心的役割を担うべきであるということです。

友の会、会員は、アイデアもあり、知っていることが多く、アンケートにもいろいろな知見が詰まっていました。友の会は歴史もあり、山博の立ち上げにも関わっているから、友の会をもっと活用して売り出すこと、友の会員の考えていることは、大町市がやろうとしている定住促進や地域創生につなげられるものがたくさんあり、それに関るのが友の会の役割と話されました。

市民は、近くにあって本来内部者なのに外部者のようになっています。これは市民が悪いのではなく一般にそういうもので、市民が山博を活用しない、来館しないというのは自然なことです。しかし、もっと山博を知ること、情報に触れることで市民は変わってきます。その情報を発信するのは山博で、活用するのは大町市です。大きなお金がかかるわけではなく、それをうまくつなげていく取り組みが必要だということでした。

以上、講演を録音から整理させていただきました。質疑応答でも市外、市内ともお話を支持する発言がありました。これらを具体化し発言していくことも友の会の役割だと感じました。貴重なご提言をいただいた麻田先生に感謝申し上げます。なお、講演に先立って、鳥羽館長から先生のご紹介がありました。先生からは海外活動、地域振興や地方創生の課題などもお話しいただきましたが、ここでは割愛させていただきました。（編集部　丸山）

烏帽子の会

活 動 報 告　飯田市　　風越山

《月日》3 月 26 日（土）　　《天気》晴　《参加者》20 名

《コース状況：その他周辺情報》

風越山（1535m）飯田市及び近隣地域の山、古くから信仰の山として人々から親しまれてきた。風越登山マラソンは 50 年余りの歴史がある。木曽山脈（中央アルプス）の前山で独立峰に近い山容で急峻であるが山麓はゆるやかな傾斜の扇状地となり、その段丘上に飯田の市街地がある。

地質は花崗岩で風化による浸食で出来た山である。中腹に虚空蔵山（1113m）を従えており麓からは 2 つの山頂が 2 段続きに見える。白山権現をまつる白山神社は、風越山山頂にある重要文化財奥宮と里宮から成り、奥宮が先にできた。神仏分離まで天台宗岩戸山白山寺と称した。奥宮の社殿の現在の建物は 1509 年に再建されている。登山道に点在する観音菩薩の石仏群、比丘尼、役小角の石像、可円和尚の名号石（六斗石）等の地名、石碑等が多く観られた。ゆっくり観たかったが時間がなかった。山頂地帯はブナの自然林が残されミズナラ、サワラ、アズサ等が少し混生している。奥宮周辺はウラジロモミ、コメツガ、モミ、ツガの針葉樹の原生林が残っている。樹下にはミヤコザサ、イワカガミ、イワウチワの群生が見られた。北限であるベニマンサクは標高 800m～1480m山頂付近まで群生しているので昭和 43 年天然記念物に指定されたが、近年、植林により減少して原生の様子を観ることが出来ず残念であった。ミツバツツジは広く自生し飯田市の花木に指定されている。訪れた時は春を告げるダンコウバイが満開であった。動物の生息も多く、近年、山麗一帯の果樹園地帯にツキノワグマ、ニホンザル、ニホンイノシシ等が出現している。「風越」の名の由来は山の尾根がくぼみになった所を風の吹き越す所「かざこし」と呼び「かざこしやま」となった（一時音読みとなり『ふうえつざん』と呼ばれた）

参考資料　信州百山（信濃毎日新聞社、昭和 45 年）　風越山イラストマップ（風越山を愛する会）

《感想》

中央道で飯田市に入ると風越山が見えてくる「いつか登ってみたい！」山であった。一緒に担当した宮澤会長は仕事で飯田市に訪れる事が多いが登る機会がない、有川は第２の故郷の山である、久しぶりに登ってみたい山であった。今回は雪が消える早春に計画した。

11 時間の行程で時間的に厳しい例会登山と思われたが 20 名の方が参加された。多

くのコースがあるが今回は表参道（メインルート）を登った。この日、飯田街内は7年に1度のお練り祭りであり登山中は花火、笛太鼓の音が聞こえ、駐車している見物客の車のフロントガラスがキラキラしていた（3日間で35万人と報道）。登山道は整備され落ち葉を踏みながら奥社付近緊張した箇所もあったが快適に登山が出来た。晴天に恵まれ南アルプス、木曽山脈から伊那谷に伸びる尾根が美しく見えた。下山は延命水に回った。小谷村から松澤ご夫妻も参加され石灯籠上まで登られ、笛太鼓の音色の元に足を延ばすことが出来たご様子、砂払温泉も楽しみ忙しい山旅となったが、晴れ晴れしい笑顔の皆さんであった。

（往復500ｋｍ近くを運転された4人の方々心から感謝申し上げます。お疲れさまでした）

《コースタイム》

大町市役所 6：00＝松川道の駅 6：25＝豊科ＩＣ＝駒ケ岳ＳＡ7：45＝飯田ＩＣ8：10＝子どもの森駐車場 8：40―石灯籠―虚空蔵山 10：35―展望台 11：30～12：10（昼食）―山頂 13：00（日夏耿之助碑）―奥の院 13：45―石灯籠 15：15―駐車場 15：35＝砂払温泉 16：00～17：00＝飯田ＩＣ＝駒ケ岳ＳＡ＝松川道の駅 19：00＝大町市役所 19：20

これからの活動計画　：　5 月 28 日（土）　総会と雨引山登山

花めぐり紀行

活 動 報 告　戸隠森林植物園をめぐる　花めぐり紀行 7

開催日：平成 28 年 5 月 1 日（日）　参加者：６名

観光客も多い大型連休中のこともあり、大町を早朝６時半に出発し、戸隠森林植物園には８時過ぎに着きました。５時間近くの散策で好天下での観察を楽しみました。リュウキンカやミズバショウ、キクザキイチゲやアズマイチゲ､スミレサイシン、カタクリ、ニリンソウが見ごろを迎えていました。

これからの活動計画
6 月 15 日（水）　花めぐり紀行８ - スカシユリ自生地（新潟県燕市角田山）をめぐる

本サークルのお問い合わせは、事務局（電話：0261-23-6334）まで。後日、代表の宮澤陽美（きよみ）さんからご本人にご連絡いたします。

山岳文化研究会

友の会サークル「山岳文化研究会」の平成 28 年度活動予定についてご案内します。

友の会サークルのひとつとして平成 26 年度に発足した「山岳文化研究会」（代表・宮澤洋介）は、現在 10 名の会員で活動を行っています。このサークルは、山岳文化史に興味・関心を寄せる友の会会員が集まり、登山史を含め、北アルプスとその山麓周辺の歴史や民俗などについて、相互に研究を重ねる場です。定期的に会合を持ちながら、研究テーマにもとづいた調査研究活動を行っています。

本年度の活動予定は、下記のとおりです。なお、友の会会員以外の方でも希望者は一般参加者として定例会などの活動に参加いただけますので、ぜひ、興味・関心のある方をお誘いいただいてお気軽にご参加ください。

【本年度の活動内容】

１　定例会

３ヶ月に１回程度、定期的に会合を持ち、具体的な各活動について報告・説明を行い、会員相互で研究を深めています。

（１）第１回･･･　〇期日：　5 月 12 日開催済み

（２）第２回･･･　〇期日：　8 月 11 日　〇場所：上高地　※兼研修会

（３）第３回･･･　〇期日：　11 月予定

（４）第４回･･･　〇期日：　2 月予定

（毎回 場所：山岳博物館 館長室、時間：午後６時～　※第２回除く）

２　研究テーマ「後立山連峰周辺における近代登山史の文献調査」（27 年度～）

黒部川側からの後立山連峰周辺山域、また、後立山連峰南部地域を中心とした山域における大正時代から昭和 30 年代までの登山・登攀記録を中心とした文献資料について調査を行い、それら文献資料を収録する山岳博物館発行の書籍編集に協力しています。

〇書　名：『北アルプス登山史資料３
―黒部川側からの登山史・後立山南部地域登山史―』（仮称）

〇発行日：平成 29 年３月（予定）

３　研修会

年１回、山岳文化史にかかわるフィールドを現地見学するなどの研修会を実施して、会全体として研鑽の機会を設けています。

○名　称：「山岳文化研究会」研修事業　※第２回定例会と併せて実施
○期　日：8 月 11 日（木・祝）
○場　所：上高地（松本市安曇）
○内　容：平成 28 年から施行される国民の祝日「山の日」を記念し、「第１回山の日記念全国大会」が上高地で開催されるのに合わせ、上高地周辺を散策して山岳文化史に関わるフィールドを探訪します。

そのほか、年間を通じて開催される山岳博物館と友の会の共催事業や山岳博物館主催事業のうち、山岳文化史にかかわる催しについて、各会員が自主的に参加しています。

研修会での探訪ポイントのひとつ嘉門次小屋。この小屋の囲炉裏の間は、建築的価値が高い山小屋として、2011 年、国登録有形文化財に指定されています。

（サークル事務局担当：関）

ボランティアサークル

ボランティアサークルでは、定例的には第４日曜日に博物館での除草や清掃作業、

山と博物館の封入作業などを行っています。

この春も、サクラソウの手入れと駅前展示から活動をスタートしました。展示は4月29日、回収は5月22日（予定）です。暖かい春で例年より早いスタートとなりました。この間、灌水等の手入れを行いました。

大型連休中は博物館付属園を中心に行われた「どうぶつ写生大会」「スタンプラリー」の受付、来館者の館内ご案内を行いました。

投　稿

『明治11年 アーネスト・サトウ 悪絶・険路の針の木峠越えの旅から』

― 田沢温泉～池田宿 ―　ウォーキング実施報告

有川美保子

はじめに

アーネスト・サトウに関心を持ったきっかけは、池田町に初めて来た外国人アーネスト・サトウが、陸郷地区の風塩峠を越えて１日で青木村の田沢温泉からやってきたことを知ってからである。

平成24年10月、長野県山岳総合センターで「アーネスト・サトウと武田久吉」の講義を日本山岳文化学会員・金子靖夫氏より受け、翌年３月には金子靖夫氏を招いて山岳博物館友の会総会記念講演を行った。昨年はサークル研修会で横浜、東京を訪ねサトウら明治初期に山岳で活動された先人の足跡を辿った。昨年から下見を始めてこのたび関心のある方に呼び掛け、このウォーキングの実施となったので、簡単な報告をする。（写真は下見時のもの）

下見は、昨年の３月、池沢を登り萱野峠から西条地区まで、今年は青木村、池沢の下りの下見をした。池沢林道は昭和30年代までは歩かれていたが現在は廃道となり、道の周辺は崩落のために寸断され、沢を高巻、渡渉する箇所が多く危険が伴うため、今回は萱野峠から岩州公園(明科地区)、高松城址を経て小立野（下生坂地区）に下山するルートにした。今回はアーネスト・サトウが１日で歩いた道を２日間の行程にした。

◎　実施日　2016年５月９日(月)～５月10日(火)

◎　参加者　６名＋１名（軽トラックサポート）

―第１日目―

池田町役場集合８：00＝バスにて＝明科駅８：54＝電車にて＝西条駅９：30―東条川沿い―東条学校跡―立川番書所跡―大ケヤキ山の神（空峠からの合流点）―東条ダム―松本街道(国道143号線上松線)合流11：50―河鹿沢(昼食)12：40―十観山（1284.5M）―昆虫資料館―田沢温泉ますや旅館着15：30着　　徒歩距離17km

新緑の中、舗装された緩やかな坂道をのんびりと寄り道、道草をして楽しく歩き、車で通過し

てしまうと解らない史跡、地元の方との触れ合いが出来た。宿までは雨は降らずに済んだ。ますや旅館は明治初期に創業され、アーネスト・サトウが宿泊している、また、島崎藤村が明治 36 年に宿泊した部屋がそのまま残されている(千曲川スケッチに登場)、木造３階建てで貴重な建物である。宿を経営されている宮原岳子さんは日本山岳会員であり、アーネスト・サトウが歩いた道についても詳しく色々と話して下さった。有乳湯（うちゆ）にゆっくりと入り上田地方の地酒を楽しんだ。

―第２日目―

ますや旅館 8：30＝西条駅 9：15―小仁熊遊歩道―伊切―大畑―大側 11：00―萱野峠 12：00―岩州公園（白州岩）13：20(昼食)―高松城址跡―（迷う）小立野地区林道 15：30―下生坂―日野橋―落合橋 17：30―風塩峠―池田町役場 18：20　　徒歩距離 23km

夜間に雨が降り出発時は晴れ上がっていた。宿のご主人に西条駅まで送って頂き歩き始めた。小仁熊遊歩道は長野道下を潜り抜ける。大畑までは平地を歩いたが、その先からは上り坂となる。大側は福寿草の里になっている。大側から登山道に入る。１時間ほどで萱野峠に着く。峠から池沢に下る道がみえるが殆ど道はなく崩落している様子が解る。旅行記に『馬が谷に転落した』とあるがうなずける地形である。岩州公園までは尾根道である。途中左眼下にヒカゲツツジ、登山道にミツバツツジが咲き目を楽しませてくれた。公園で昼食を取り高松城址跡、不動岩をとおり滑り易い岩の道を注意しながら下った。林道に出るが、そのまま下生坂地区を目指したが竹やぶに覆われた古民家の先で道が寸断されており林道に戻り下山した。体調、靴の破損などで軽トラックに１名ずつ３名の方が下山した。予定していた時間を１時間余り過ぎていたが池田町役場を目指してひたすら歩いた。落合橋にて仙波さんも軽トラックで帰路に着いた。仙波さんと別れた途端雨となりうす暗くなる中、傘をさして中山さん、有川で風塩峠を登り役場まで歩いた。やっぱり、仙波さんは晴れ女！有川は雨女！

日本旅行記１（平凡社発行）第３章　悪絶・険路の針の木峠と有峰伝説　明治 11 年 7 月 20 日、7 月 21 日の文章、地図（宮澤会長提供）を参考にして下見を何回もして歩いたが、140 年の歳月を経て人々の生活様式が変化し生活道路を含め環境の変化が予想以上に大きくルート変更を数カ所した。当時の道をどこまでたどれたか不明であるが、しかし、石碑や大木が当時の導となり一部ではあるが伝えていた。当時は「歩行中心の生活で旅は早朝から」そう考えると峠越えの 40km の道を１日で歩くのは普通のことであったようだ。

一昨年、塩の道・千国街道の締めくくりに相沢先生から山中往来の話を伺い、興味のある方もいるのではないでしょうか。東山道を歩き保福寺峠に出て北アルプスの山並みに感動したウエストン、保福寺峠から続く尾根道を歩きアーネスト・サトウが歩んだ道をたどり田沢温泉に泊まる計画もしてみたい。

萱野峠にある案内板

田沢温泉３階建てのますや旅館正面玄関

《 お 知 ら せ 》

ライチョウサポーターズ情報　長野県環境部自然保護課より

平成 28 年度のライチョウサポーターズ向け講習会をご案内します。必要に応じてお申し込みください。

6/12　ライチョウサポーターズ養成講習会

7/1-2　″信州″山の自然楽講座　「燕岳で学ぶライチョウの生態」

◆ライチョウサポーターズ養成講習会

日　程：平成 28 年 6 月 12 日（日）

場　所：市立大町山岳博物館（大町市大町 8056-1）

主　催：長野県　／　協力：市立大町山岳博物館

内　容：

午前の部（新規登録者優先）

・講義：ニホンライチョウの現状と保護の取り組みについて（仮）

宮野典夫（市立大町山岳博物館 指導員）

午後の部（登録者対象）

・講義：ニホンザルの生態について（仮）

陸　斉（長野県環境保全研究所 自然環境部長）

※北アルプスではライチョウ生息地にニホンザルが侵入し、雛の生存に対して脅威となっています。本講義ではニホンザルの生態を学びます。

参加費：無料

定　員：70 名

申　込：6/6（月）までに長野県環境部自然保護課（担当：畑中様）へ問い合わせの上、必要書類で申し込みください。

◆″信州″山の自然楽講座　「燕岳で学ぶライチョウの生態」

長野県山岳総合センターの主催講座を、ライチョウサポーターズ養成連携事業として開催します。

日　程：平成 28 年 7 月 1 日(金)～7 月 2 日(土)（1 泊 2 日）
場　所：北アルプス燕岳（標高 2,763m）　燕山荘泊
内　容：燕岳の登頂を目指しながらライチョウを観察しその生態を学習
対象者：夏山登山経験者で、標高差 300m を 1 時間程度で登ることができる 70 歳までの方
定　員：30 名
参加料：27,000 円（宿泊費用・保険料込）
申　込：山岳総合センターホームページから等（実施詳細も必ず確認ください）
★長野県山岳総合センター　〒398-0002　長野県大町市大町 8056-1
【電話】（0261）22－2773　【ＦＡＸ】（0261）22－5444
【HP】 http://www.sangakusogocenter.com/
【E-mail】　info@sangakusogocenter.com

ゆきつばき通信編集室より

総会報告をいたします。総会での講演の内容なども掲載しました。また、各サークルからのご案内も掲載いたしました。

山博・友の会共催行事は「山と博物館」でご案内しています。6 月 22 日（水）には山の歴史ウォーキング 体感！ 山岳文化都市おおまち「平野口編」が行われます。この日は 7 年に 1 度行われる西正院大姥堂のご開帳で、大姥尊像も拝観できます。

報道等でもお知らせされていますが、山博でのニホンライチョウの飼育が再開される運びとなりました。友の会でも博物館と協力してライチョウ関係の行事を多く開催してきました。その成果もあったと思われます。詳しくは「山と博物館」でご案内となります。

同封のゆきつばきにも書きましたが、発行物の棲み分けにより、皆さんの行事参加感想文や山行の投稿などもこの通信紙上で載せていきます。ぜひ投稿をお願いします。次号は秋頃発行の予定です。

〔投稿先〕
編集部丸山アドレス　takuya-m@juno.ocn.ne.jp　（件名に「ゆきつばき通信」を付けてください）　もしくは、山岳博物館の事務局にお送りください。

（丸山卓哉）

ゆきつばき通信　第 168 号
発行／大町山岳博物館友の会　　平成 28 年 5 月 22 日
〒398-0002　長野県大町市大町 8056-1
大町山岳博物館内　山博友の会事務局　　Tel/Fax 0261-23-6334
会費振替口座番号　00550－2－24194　加入者名　山博友の会
山博ページ　http://www.omachi-sanpaku.com/
友の会は、山博の情報発信のために山博ホームページの維持に協力しています